



さいたま 来ぶらり通信

さいたま市図書館報

2015年8月15日発行

Contents

わがまち Sai 発見..... 1, 2

本棚ぶらり

大人も楽しめる絵本の世界..... 3

ハロー!来・ぶ・ら・り 桜図書館大久保東分館

古本バザール

ほか..... 4

わがまち

はっけん

Sai 発見

うらわと うなぎ

江戸時代、今の浦和区には「浦和宿」という中山道の宿駅がありました。周辺には川や沼が多く、たくさんのうなぎがとれたそうです。中山道を行き交う人々にこのうなぎを提供したのが、名物「浦和のうなぎ」の始まりといわれています。今年は、夏に「土用の丑の日」が2回ある年（7月24日と8月5日）。さて、蒲焼きができてから、さいたま市とうなぎのうんちく話でもいかがでしょう？

浦和の縄文人もうなぎ好き？

日本人は縄文時代からうなぎを食べていたことがわかっています。別所真福寺貝塚（南区別所）を始め、北は北海道から南は沖縄まで、日本各地の縄文・弥生時代の貝塚でうなぎの骨が見つかるからです。

奈良時代の歌集『万葉集』巻16には、うなぎの歌まで詠まれています。「石麻呂に 吾物申す 夏痩せによし」といふものぞ おなぎ捕り喫せ（大伴家持）。友人の石麻呂に、夏バテ対策としてうなぎ（おなぎ）を勧めるといふ内容で、すでにうなぎが精のつく食べ物として知られていたことがうかがえます。

「浦和とうなぎ」の文献は？

浦和とうなぎの関わりを今に伝える古文書があります。江戸時代後期に書かれた『会田家文書』（埼玉県立文書館収蔵）には、浦和から江戸赤坂の紀州藩邸にうなぎを献上していたことが記されています。また、幕末の弘化年間（1848-1855）に作られた浦和宿の絵図には蒲焼き屋の名があり、その頃には浦和に蒲焼き屋があったことを教えてくれます。

昔は、荒川や綾瀬川でうなぎ、鯉、なまずといった換金性の高い魚がとれ、川沿いの地域には50年ほど前まで漁をなりわいにする人々もいました。現在の桜区にあ

る田島、道場、中島などには「漁家」が一戸ずつあったという記録が残っています（『1970年世界農林業センサス』）。用排水路にも魚が多く、うなぎの稚魚であるシラスウナギもいたと言われています。

北浦和図書館とうなぎ

北浦和図書館では、「うなぎコーナー」を設け、うなぎに関する資料を絵本から専門書まで幅広く収集しています。また、うなぎ関連の資料を紹介しているブックリスト「読むうなぎ」も配布しています。



▲全国的にも珍しい北浦和図書館の「うなぎコーナー」ブックリストで読みたい「うなぎ本」を探そう

天王川で子どもが「うなぎかき」

市内在住だった武藤公吉氏（1901-2001）が、明治から昭和初期の暮らしについて語った『うなぎのとれたころ』（1987）という資料があります。

この資料の中で武藤氏は、天王川で、泥の中からうなぎをとる「うなぎかき」をしたときの様子を語っています。「うなぎかき」には、うなぎをひっかけやすいように古い刀を鍛冶屋に改造してもらったものに、竹の柄を付けた道具を使ったそうです。

（天王川は浦和区を流れる川で、現在は暗渠となっています。）

次世代へつなげ、うなぎの伝統

うなぎが地元でとれていたこともあり、浦和には伝統の技と味を伝えるうなぎ屋が今でもたくさんあります。さいたま市では「岩槻の人形」「大宮の盆栽」とともに「浦和のうなぎ」を伝統産業に指定しています。

「うなぎの街 さいたま」を広く周知するために実施している「さいたま市浦和うなぎまつり」は、今年5月23日に第14回目が開催され、うなぎ好きの市民でにぎわいました。うなぎ弁当は限定2000食で朝9時半から整理券が配布される人気ぶり。弁当を手につけて、会場をあとにする親子連れはみなそろって笑顔でした。



▲市役所東側広場と駐車場で行われた浦和うなぎまつり
浜松市や浜名商工会など県外からの出店も



（背中背びれもかわいいです）

▲やなせたかし氏作の浦和うなぎちゃん「浦和のうなぎを育てる会」のイメージキャラクターで市の観光大使

関東と関西で違う蒲焼きレシピ

「串打ち三年、割き八年、焼き一生」と言われるほど、蒲焼き作りには熟練の技が込められています。関東ではうなぎの背中から割き、白焼きと本焼きの間に「蒸し」の工程が入るので身がふっくらしています。関西では腹から割いて「蒸し」の工程がなく、頭を残したまま焼き上げるのが特徴で、パリパリした身が楽しめます。

武士社会の江戸で切腹が嫌われたため、関東では背中を割くようになったという説もありますが、背開きの方が「蒸し」のときに身が串から外れにくく、調理しやすいという事情もありそうです。



▲うなぎまつり「実演コーナー」での1コマ
食欲をそそる香りも蒲焼きの魅力です

名コピー「本日、土用丑の日」

土用の丑の日にうなぎを食べる習慣は、江戸時代に平賀源内の考案した「本日、土用丑の日」というキャッチコピーによって広まったという説があります。もともと、この時期には土用餅というあんこ餅や、土用蛭、土用卵などで精をつける習慣があった上、うどん、瓜、梅干しなど、「う」のつく食べ物を丑の日に食べると体にいいという言い伝えもあり、土用の丑の日とうなぎの組み合わせはまさにぴったりだったと言えます。

昔の浦和でも土用の時期はうなぎや餅を食べて夏バテを防いでいたそうです。

さいたま市と密接に結びついたうなぎとその文化に、今後も目が離せません。

主な参考文献（図書館で貸出・予約できます）

- ・『浦和』第5号 浦和〇名店会 1966
- ・『浦和市史 民俗編』浦和市総務部市史編さん室／編 浦和市 1980
- ・『うなぎのとれたころ』武藤公吉／〔著〕
浦和子どもの本連絡会／編 浦和子どもの本連絡会 1987
- ・『旅するウナギ 1億年の時空をこえて』黒木真理・塚本勝巳／著
東海大学出版会 2011
- ・『日本うなぎ検定 クイズで学ぶ、ウナギの教科書』
塚本勝巳・黒木真理／著 小学館 2014

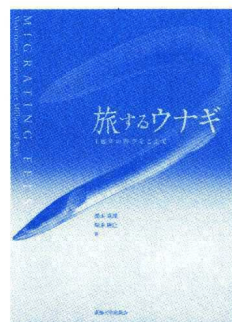
本棚 ぶらり

うなぎの研究

ウナギの生態について少しずつ分かってきた部分もありますが、全てが解明されたわけではありません。まだまだ謎に包まれています。その解明の足がかりというべき研究の一端がわかる本をご紹介します。

『アフリカによろり旅』(青山潤／著 講談社 2007)は研究者である著者達が、ウナギを求めて旅する冒険記です。ウナギの形態と遺伝子を調べるという研究で、ウナギ全種類の標本を採集することになり、最後の1種を探してアフリカへ。行く先々で耳にした噂話や地図だけがたよりという乏しい情報の中、行き当たりばったりで湖や川に向かいます。炎天下で2時間近く歩いたり、食堂で不思議な毛がからみついた肉がでてきたり、手持ちの飲料水が底をついたり、きわめて過酷な環境です。それでもウナギを探す著者の情熱に圧倒されます。

陸での探索に続いてご紹介するのは、海上での研究です。ウナギは海と川とを行ったり来たりする魚です。『世界で一番詳しいウナギの話』(塚本勝巳／著 飛鳥新社 2012)には、2009年に世界で初めて天然ウナギの卵を採集し、産卵場所の謎が解き明かされる様子が書かれています。調査



『旅するウナギ』

(黒木真理・塚本勝巳／著
東海大学出版会 2011)

には、椀子そばの「お代わり」を思わせるようなものもありました。大量のプランクトンのサンプルを、少しずつ小さなガラスの容器に入れ、卵や孵化直後のウナギを探す作業を、サンプルがなくなるまで繰り返すのです。次の調査地点に着くまでに終わらせるのは時間との戦いで、厳しいものだったそうです。

さて、養殖の研究にも触れておきます。卵から成魚までを人工的に育てる「完全養殖」が実験室レベルで成功しました。『うなぎ 謎の生物』(虫明敬一／著 築地書館 2012)では、達成までの歴史をたどることができます。どうして養殖ウナギは雄ばかりなのか、どうして養殖では産卵しないのか、どうしたら餌を食べるのか、立ちはだかる壁を打ち破っていく研究者の苦労がうかがえます。

『旅するウナギ』(黒木真理・塚本勝巳／著 東海大学出版会 2011)には、今までご紹介した3冊に出てきたウナギ全種類の標本、天然ウナギの卵、養殖ウナギの成長段階が写真で紹介されています。

大人も楽しめる



絵本の世界

第10回



『うなぎのうーちゃんだいぼうけん』

くろき まり／文 すがい ひでかず／絵
福音館書店 (2014)

誰もが知っている身近な存在なのに、その詳しい生態は謎に包まれていたウナギ。2009年にマリアナ海溝で、世界で初めてウナギの卵が見つかり、長年謎だったウナギの

産卵場所がようやくわかりました。この発見を受けて研究は進み、近年になってその生態を紹介した本が数多く出版されるようになっていきます。しかし低い年齢の子どもでも楽しめるような科学絵本でおすすめるような本は、これまでほとんど出版されていませんでした。

そんな中、昨年出版された『うなぎのうーちゃんだいぼうけん』は、待望の一冊といえるでしょう。南の海で生まれた「うなぎのうーちゃん」は、潮の流れに乗り日本にやってきます。海から川に上るウナギを狙って、漁が行われます。ここで捕獲されたシラスウナギと呼ばれるウナギの稚魚を養殖したものを、私たちは普段食べているのです。漁から逃れたウナギは川を上り、川で5～10年くらい暮らします。様々な試練を乗り越え、再び海へ戻るウナギの大回遊の物語です。

物語絵本の様式で、顔だけは多少デフォルメされたウナギにはなっていますが、何よりも色鮮やかで迫力のあるイラストが目を引きまします。表紙を開けると、見返しの部分には、見事に成長したウナギの実寸のイラストがドーンと載っていますので、ぜひ本を手にとってご覧ください。「ウナギってこんなに大きかったんだ」と感動すること請け合いです。

桜図書館 大久保東分館

桜図書館大久保東分館は桜区にある大久保東公民館の1階にあります。

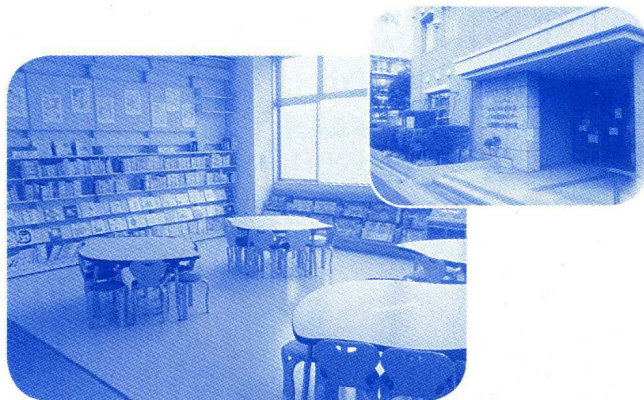
平成16年に「大久保東公民館こども図書室」として開室、のちに図書館として整備され、平成19年に桜図書館大久保東分館として開館しました。大久保東分館の面積は305㎡、蔵書数は約3万4千冊。とても小さな図書館ではありますが、もともと子ども図書室として開室したこともあり、蔵書全体に占める児童書の割合が、桜図書館では3割弱なのに対して実に約7割にも達するのがこの図書館の最大の特徴です。

毎週木曜日には館内の絵本コーナーで、おはなしボランティアによるおはなし会が行われています。また、公民館とそこにある児童センターでは、地域に暮らす大人から子どもまでを対象に集会の場を提供し、講座や催しを行っています。

付近は閑静な住宅地ですが、歴史、自然を感じ

ることができる場所にも事欠きません。豊かな林と、10mにもなるウスギモクセイの高木が目を引く「大泉院」は室町時代に建立された曹洞宗の古刹です。大久保地区開拓の祖神の一つとされた「日枝神社」の参道脇にあるケヤキは、樹幹の太さでは県内最大といわれ、県指定天然記念物に指定されています。また、「身形神社」には人間の背丈よりもはるかに高い姿が印象的なセイコノヨシが自生しています。「在原業平が地に挿した筆が根付いた」という伝説を持つ市指定天然記念物です。

悠久の歴史、豊かな自然に触れたあとにはぜひ大久保東分館にお立ち寄りください。



古本バザール・リサイクル を実施します。

さいたま市の図書館では、図書館友の会と協力して、古本バザール・リサイクルを開催し、保存期限の過ぎた雑誌や不用になった図書を市民の方へ提供しています。

昨年度は10会場で実施し、約7,200人の方にご来場いただきました。今年度も10会場で実施を予定しています。ぜひご来場ください。

日程	会場	連絡先
9/20(日)	大宮西部図書館2階ギャラリー	大宮西部図書館
10/17(土)	プラザエスト2階多目的ルーム(イベント名は古本市)	桜図書館
10/17(土)	春野図書館2階会議室	春野図書館
10/17(土)・10/18(日)	北浦和図書館地下講座室	北浦和図書館
10/24(土)	中央図書館イベントルーム	中央図書館
10/31(土)	岩槻本町公民館	岩槻図書館
10/31(土)	さいたま市文化センター	武蔵浦和図書館
12/5(土)	片柳コミュニティセンター2階第5集会所(図書館のとなり)	春野図書館
12/19(土)	大宮図書館1階展示ホール	大宮図書館

※7月時点の予定です。詳細については各連絡先へお問い合わせください。

編集：さいたま来ぶらり通信編集委員会 発行：さいたま市図書館

<http://www.lib.city.saitama.jp/> 携帯電話用 <http://www.lib.city.saitama.jp/m/> (下のQRコードを読み込んでください)

北浦和図書館 832-2321	三橋分館 625-4319	与野南図書館 855-3735	大久保東分館 853-7100
東浦和図書館 875-9977	春野図書館 687-8301	西分館 854-8636	北図書館 669-6111
大宮図書館 643-3701	大宮東図書館 688-1434	岩槻図書館 757-2523	宮原図書館 662-5401
桜木図書館 649-5871	七里図書館 682-3248	岩槻駅東口図書館 758-3200	武蔵浦和図書館 844-7210
大宮西部図書館 664-4946	片柳図書館 682-1222	岩槻東部図書館 756-6665	南浦和図書館 862-8568
馬宮図書館 625-8831	与野図書館 853-7816	桜図書館 858-9090	

事務局：中央図書館 浦和区東高砂町11-1 TEL 048-871-2100

【今号のうなぎの表記について】歴史的・民俗的な内容・固有名詞については「うなぎ」を使用し、それ以外の場合については「ウナギ」を使用しています。

★★編集後記★★ 先日、「うなぎ味のナマズ」の開発に近畿大学が成功したというニュースが流れました。減少が心配されているうなぎの強力な味方になるかもしれません。次回発行予定：11月15日(年3回発行)

